

浄土

1981-2

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授承認可）第三五号
昭和五十六年一月二十五日印刷
昭和四十二年一月一日発行
第四十七卷 第二号



空のかなた、星と月

空にはこんなにも多くの星があつたのであろうか。今から二十年も前になるが、私は冬のある日、中インド最大の仏教遺跡、サーン



チー大塔の丘に坐つて空をあおいでいた。文字通り物音一つしない静寂そのものの夜のとばりの中で、すみきつた大氣を通してまたたく無数の星の光が、私を足許から包みこんでいた。あたかも、自分がたつた独りで無限の宇宙の中になげ出されたような感じで、星の美しさより先に、何ともいえぬ恐怖に襲われたことを記憶している。

今、都市に住む人々は、夜空を眺めるということを忘れてしまったようである。それは日々の生活があまりにもあわただしいからであらうか。或いは、深いスモッグに覆われ、大空のかなたに光を求めようとする努力が、無益なことを知っているがためであらうか。私はあらためて浄土宗の宗歌を思ひうかべてみる。

月影のいたらぬ里はなけれども
ながむる人の心にぞ住む

月の光は万古の昔から変わることなく夜の地上を照している。太陽の強烈な光とは違って、淡い光である。ちよつとばかり薄い雲が空にたなびいても、月の光はかき消されてしまふ。しかも夜である。人々は寝静まつて、その光をおおぐものは少ない。しかし月の光は、すべての野や山や里を照し、人の心をも照している。阿弥陀の慈悲の光、それはすべての人々の心を包む。我々はその光に包まれていることを知りながら精進努力の道を歩まねばいけない。日々の生活を力強く生きぬかなければいけない。人は、ものがうまうま行かないと、すぐこれを他人の責任にしたがる。現今の社会では特にこの傾向が強い。人さまにたよることをやめて、自分で道をきり開いて行きたい。失望しないで、輝く星を探しながら生きて行きたいと思う。空のかなたに、星も月も輝いているのだから。

(佐藤良純)

二月号



念仏をもって王三昧とす。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集1 p.152)

目次

二月に法然上人を思う……………須藤隆仙……(2)

法話

親と子—涅槃会に寄せて—……………里見達人……(6)

涅槃会俳談……………細田隆善……(14)

■随想■ 仔犬タロ

—伊豆高原徒然草より—……………木下隆一……(9)

(連)(載)(法)(話) 第五回

兩足尊し……………小布施弘学……(20)

〈随想〉ほとけとの出会い(十)……………佐竹隆三……(24)

＜連載＞

アンコール・ワットSOS(二)

—倒壊の危機に直面するアンコール・ワット— 石沢良昭 ……(32)

浄土句集……………一田牛畝選……(28)

＜表紙のことば＞ 白水仙……………土屋正男……(30)

＜表紙裏・巻頭言＞ 空のかなた、星と月……………佐藤良純

念仏ひじり三国志⑧ —法然をめぐる人々……………寺内大吉……(37)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部



二月に法然上人を思う

須^す藤^{どう}隆^{りゅう}仙^{せん}

(函館市称名寺住職)

二月といえば本州では梅を見る地方もあるだろうが、北海道では、逆に一ばん雪の多い月である。

二月の雪は、あまりきれいではない。暖房燃料の煤煙で、空気の汚染度がひどく上ってくる頃だからである。一年中で一ばん暗い感じのする月である。

しかし、それでも、春が近づいている実感はある。三月ははや彼岸なのだから、気分的にも春間近しである。

二月といえば、私は、法然上人のご生涯のなかで、二月に重大な事件が二つあったことを思い出す。

一つは、少年の法然上人が、比叡山に入られたのが、『勅修御伝』によれば久安三年(一一四七)の二月であり、いま一つは、七十五歳のご高齢で、遠流の宣旨が下ったのが、やはり『勅修御伝』によれば、承元元年(一二〇七)

の二月なのである。

父が夜討ちにあい、それがもとで亡くなり、その臨終の遺言によって出家の道に入られた上人は、母の弟に当る観覚という僧が、郷里から十里ばかり離れた所に住職していたので、まずそこにあずけられたが、叔父観覚は勢至丸(のちの法然上人)の器量に感じられ、辺地におくのは惜しいとして、比叡山へ送ることを考えられたという。比叡山といえば、仏教研究の、あるいは仏道修行の、最高学府、最高道場といわれた所であるから、そこへ登るといふことは、いまでいえば、地方から中央の大学へ行くようなものである。希望にみちみちて上京する

のであるが、『勅伝』（以下、勅修御伝を勅伝と記す）の伝えるところでは、観覧からこのことを聞いた勢至丸は、『旧里にとどまる心なく、花洛を急ぐ思いのみあり』といった状態で、世の常の子の如く、京へ出られることを喜んだのであった。

法然上人の御伝記はさまざまあるが、その中で、最も有名なものが『勅修御伝』即ち『勅伝』で、文字どおり勅命で撰述製作されたものであるが、この伝による限りでは、比叡山へ登るために京へ向われたのは、久安三年の二月ということになっている。（久安元年十三歳のときとする伝もある）

一人のこる母は大変悲しまれ、「そでに余る悲しみの涙、小児の黒髪をうるおす」というありさまで、「かたみとてはかなき親のとどめてし、この別れさえまたいかにせん」と詠まれたのであった。

京都へ行く途中、鳥羽の新街道で摂政藤原忠通公のお通りに出会い、勢至丸は馬からおりて道のわきに控えていると、忠通公はわざわざ乗物をとめられ、「どちらの国の者じゃ」とお言葉をかけられ、つき添いの僧が上京するわけなどを簡単に説明すると、公は会釈をくれて通り

過ぎられたという。のちに公は、「さっき会った子は、眼が光っておった。並みの子ではないだろう」といったという。

歴史学の上からは、そのような話は作り話だともするが、希望に満ちて上京する少年の眼が、輝いていても不思議はないのである。



上人が浄土宗を開宗され、その教えが盛んになると、旧仏教の衆徒から朝廷に対し、これを停止してくれとの請願が出され、また門弟のなかにも問題を起す者があつたりして、承元元年、上人に流罪の宣旨が下った。大きな法難であった。

『勅伝』その他によれば、上人は名を「藤井元彦」と変えられ、遠流の身となせられたのである。『勅伝』に載る宣下状を早田哲雄師は、『勅修法然上人御伝全講』の中で、次のように現代語訳してくださっている。

「太政官からの書付け　土佐（高知県）の国司へつかわす

官が流罪に行なう人の名は、藤井の元彦という者

流罪を行なうための使者は、左衛門の府生ふしょうという
官人の清原の武次たけつぐと、その供かどべの者二人

門部かどべという流罪をつかさどる役人が二人と、その
供の者が銘々一人ずつ

右にしるした流罪人元彦を受け取って配所に護送する
ために、以上の人たちを使い役として、差しつか
わす事は上に示す通りである。配所の国土佐におい
ては、当たりまえに仰せを納得して、常のように勅
命を実施せねばならぬ。道中に当たる国々も又、必
ず食糧や渡船、及び伝馬でんま三匹を提供せよ、この書き
付けが着いたら命のように行なえ。

第八十三代土御門朝の建永二年（一二〇七）二月
二十八日。署名人は、右大史の中原の朝臣がしる
すもので、その上官左少弁さしやうべんの藤原の朝臣が連署す
る」

以上のように、宣旨の下ったのが二月である。このよ
うに、上人のご生涯中に、二月に重大な出来事が二つあ
った。先のほうはよい出来事だが、あとは悲しい出来
事であった。だが上人は、流刑を恨みとはしない、と仰
せられ、このことによって、辺地の人たちに念仏を勧め

ることができるのは、却って朝恩である、と仰せられ
て、悠揚ゆうやうとしてかの地に赴かれたのである。

○

もっとも、当時は旧暦なのだから、二月といっても、
新暦では三月である。梅どころか、早い所では桜さえ咲
くであろう。この春に、このような出来事のあられたこ
とを思い、上人思慕の念を、まずばかりである。

また、逆に、新暦の二月は、旧暦ではまだ一月であ
る。その一月は、浄土宗徒にとつては大変な月で、上人
様が大往生された月である。『勅伝』はそのときのご様
子を、次のように伝える。

「建暦二年（一二二二）正月二日より……二根明利みねあきとしな
る事むかしにたがわず同三日、ある弟子、今度の御
往生は決定けつぎょうかとたずね申すに、われもと極楽にあり
し身なれば、さだめて帰り行くべしとの給う……二
十五日午の刻よりは念仏のみ声ようやくかすかにし
て、高声はときどきまじわる。まさしく臨終にのぞ
み給うとき、慈覚大師の九条の袈裟をかけ、頭北面
西にして、光明遍照、十方世界、念仏衆生、攝取不

捨の文をとなえて、ねぶるが如くして息たえ給いぬ。音声とどまりてのち、なお唇舌を動かし給うこと十余返ばかりなり、面色ことにあざやかに、形容笑めるに似たり。建暦二年正月二十五日午の正中なり。春秋八十にみち給う」



上人には、春・夏・秋・冬を、念仏のみ心によって詠まれた御歌がある。二月は梅月といっても、氣象的には、まだ冬なのだから、冬の御歌を排し上げると、

雪のうちに仏の御名を唱うれば

積れる罪ぞやがて消えぬる

とあり、よく周知されている。

北国に住む者にとって、この歌はとくに感深いものがある。雪は白く美しいもののようにではあるが、じつは脅威の面をもつ。雪害の恐しさは、毎年、新聞その他で報じられる。「白魔」という言葉さえあるように、冬には何人かが雪のために命をとられさえるのだ。

音もなく降り続ける雪は、アツという間に、すべてを埋め尽してしまう。交通機関も麻痺してしまう。

しかし、このような白魔が、熱にはめっぽう弱い。春になって太陽熱が強くなってくると、どんどん消け出して、川のように流れる。湯をかけると、忽ちその部分だけなくなってしまうのも、経験のとおりである。

法然上人は、お念仏で罪障の消えるのを、雪と熱の關係でご教示された。どんなに大きく積っている罪業も、ひと声のお念仏で消滅することは、お経様に説かれるとおりである。『観無量寿経』には、「仏名を称するがゆえに五十億劫生死の罪を除く」と仏説されている。

魔悪修善（悪事を止めて善事を修する）などといわれても、行じ得るものではない。第一、三度三度の食事ですら、膨大な他者他物の生命を殺したものでばかりではないか。五戒すら保つことができないわが身は、なにによって救われるであらうか。罪障で身動きできなくなったわが身は、なにによって助けてもらうのであらうか。

法然上人が教えられたお念仏以外にはあるまい。そんなことを考えながら、二月の雪を眺めているのである。

法 話



親と子

——涅槃会に寄せて——

里見達人

(淑徳中・高等学校長)

背の高い、しかし弱やかな桜の木が寂かに枝をはっている。

淑徳高校の正門を入るとすぐ右にある。

やがて春四月がくると、爛漫たる花は枝に溢れ、花びらは風に舞って散りながれる：

“今年もまた 鴨ざくら が咲く——”

涅槃会が近づくころ、私はいつも独り悲しい親のころを回想するのである。

水の流れるように年月は過ぎてしまった。

お旧い先生がたでも、もう遙かに薄れた昔の出来ごとも知れない。

当時、淑徳高校に“鴨紀子さん”という生徒がいた。

余寒いまだ厳しい二月十五日の朝、つねと異って起きて来ない紀子さんを起そうとして、お母さんがみたものは、寂々として息絶えた吾が子の死の姿であった。

それも、紀子さんのかねての願いによって、やっと二階に建て増された小さな勉強部屋の、寒かろう、との父母の

愛ゆえに設置されたガス・ストーブのために……

若い命を奪ったのはガスの不完全燃焼による中毒死であった。

その明けがた、階段を降りる若い足音を母上に耳にしており、紀子さんは手洗いよりのもどり、早朝の冷えこみにストーブを点火し、再び眠ってしまったの奇禍であらうとのことであった。

嗚呼、それにしても、稚く愛らしい乳児のころから、ただただ慈しみ育てて十七歳！

柔らかにふくらむ蕾のような吾が子が、父の力も、母の愛もとどめるにすべなく、その朝、忽然として寂滅の露と消えてしまったのである。

切なくやりきれない、この父母の悲しみはもはや筆舌の域をこえて、子を持つ親のところに痛ましい共感をもたらすであらう。

父母の悲涙ただ亡き子を思う袂を濡らすうちに四十九日忌を迎え、その志として「亡き娘に代って淑徳に生きよ」と一樹の桜木が学校にのこされたのであった……。

その後、幾星霜、難病にかかり医療の甲斐もなく、あとに悲しみを残して寂静の世界へと旅立った傷ましい生徒も何名かいた。その父母の思ひは、またどんなであったであらう。

「死んだ吾が子は、年若い者なのだから、あの世への道も知らないだろう。どうか死の国の使いよ。贈りものをあげるから吾が子をいたわって、死出の旅の案内をしてください」という悲しい万葉の古歌がある。

子を思う親のところに、今昔の变りはない。

若く死んだ吾が子を送った父親のことばに、

「出棺に際して、なにも持たせずに旅立たせるにしのびず、私は私たち夫婦の写真を入れてやりました。せめて私たちも一緒にあの世への旅について行ってやりたい思いからでした。そして「おべんとう」と「おこずかい」も入れ

てやりました。生きていた吾が子を学校へ送り出すと同じように旅立たせてあげたかったのです」

何にもまして悲しく美しいのは子を思う親のころであらう。

慈悲とは、人のもつ根元的な悲しみをしみみといつくしむ愛を言うのだそうである。

そしてそれは、かわくことなく、うるおいつづける人の子の親のころなのである。

去る夏休みに、増上寺さんをお願いして三泊四日の「修養の会」という催しをした。

その会のある夜の講話の席で、付添いの本校のある先生が亡き義母上の話をなさった。

その話のさなか、亡き義母上を憶う思いが胸に充ちて、先生は思はず絶句して声うるむ情景であったそうだ。

後日、その会に参加した、私のよく知る生徒が「あのお話を聴いて、たった一度の人生を私を愛し育て、私のために生きてくれる、一人しかいない父や母を大切にしよう」と決心しました」と言ってくれた。

お金と物と自我中心のように思える現代子も、やはり有情の人の子なのだ。

その内在する仏性を振幅すること、生徒たちは人の持つ根元的な悲しみを見つめ、しみじみと吾を思い父母を思い、かわくことなくうるおひある優しい情にと育つのである。

人の生きかたのすべては、そこから始まるのだ。

その優しい情の輪は大きく育って、生きとし生くるものにうるおひのところで接し得る人として成長してゆく。

年々歳々「鴨ざくら」は春を待つて繚乱たる白花を咲かせ、多くの生徒たちはこの桜の由来を知らず、花散る下を笑いさざめて通ってゆく。

その若い肩に、人の世の親の熱い思いを秘めた花びらをのせながら……
そしてまた、この生徒たちもいつの日か人の親になるのである。



仔犬 タロ

— 伊豆高原徒然草より —

きの した りゅう いち
木 下 隆 一

(随筆家)

てしまった。それぎり杳として行方が知れないのである。

○

今年も伊豆高原で無事正月を迎えた。四度目の正月である。豪雪に泣いた地方の方々には申し訳ないが、今年も去年同様うらうらと晴れたいい正月であった。しかし、ここで迎えた正月の中では最初の、昭和五十三年の正月が私には一番印象的である。新居で迎えた新年ということもあったが、家族の一員として仔犬が加ったのが、その年の正月をより印象的なものにしたのである。

その『タロ』と名付けた柴の仔犬は、半年ほど我が家にいたが、ある日ふっと姿を消し

最初に犬を飼おうと言い出したのは犬嫌いなはずの女房の方であった。高校を卒業したらアメリカから帰って来るものばかりと思っていたひとり娘が、むこうの大学へ進み、少くとも四年は手許に戻らないという淋しさが女房にあったのであろうが、そんなことはおくびにも出さず、

「あなたを一人で伊豆に置いておくと、ご飯を食べないで、ビールばかり飲んでいってしょ。犬でもいれば飢えさせるわけにもいれないから、ご飯を作ってやるでしょ。そしてついでに自分もご飯食べる気になるでしょ」

変な三段論法だったが、後にして思えば女房の狙いは図星だったと言える。『タロ』という名前は娘のひろみが付けた。手紙や電話で何度か名前を考えろと言ってやったのだが、答えはなかなか返ってこなかった。

伊東の犬猫病院に柴の仔犬がいると聞いて、いつも電気工事を頼む鈴木さんという人の案内で行ったのは、十一月の終り頃だっただろう。

生後二カ月足らず。三匹のキョウダイ（雌雄不明）と共に、狭い中でゴシヨゴシヨやっていた。小さな耳がピンと立った、見た目にはなかなかいいチビたちであった。

「雄がいいんですが」と言うのと、

「雄はこれとこれ」

と、年輩の獣医さんは無造作に檻の中から二匹をつまみ出した。尻尾の先の白いのと黒いやつとである。黒い方は尾がキリリと左に巻いている。口を開けて舌を見たが、懸念した青い痣は見当らなかった。チャウチャウ種の混血の子孫に、往々にしてこの痣が見られるからである。仔犬の時はわからないが、長ずるに及んで柴とは似て非なる犬になってしまふ。だが、その心配はなかった。

「こっちにします。尻尾の先の黒い方」

私はもう一匹には見向きもしないで即決した。前足の白い、いわゆる足袋足白爪には目をつぶった。というのは、足袋足白爪の犬は喧嘩に弱いと少年時代に聞かされたことがあったからである。しかしこの説にはなんの根拠もないし、それに私はこれから飼う犬を喧嘩犬に仕立てるつもりは全くなかった。ただ私のそばにいて、いささかでも無聊を慰めてくれればいいのである。ではなぜこの犬に決

めたかというとき、初めて目が合った時、ちょっと首をかしげて、いかにも可愛いなんともいえないいい目をしたからである。一目惚れだった。

その後、十二月に入って、私は突然過労から来た高血圧症で倒れてしまった。女房はてっきり私が死ぬものと思っただけで、ひろみに電話して、

「おとうちゃんまが死にそうなの、そちらから電話で呼んであげてね」

と言っただけだった。

気がつくとい私は蒲団の上に寝ていて、受話器を握っていた。ぼやっとどこからか声が聞えて来る。

「……可愛い？」

「うん、可愛いよ」

「名前つけた？」

「まだ。名前はお前にまかせたじゃないか」

その時、急に意識が甦って、ああ俺はひろみと話しているんだと思った。

「タロ、タロがいいわ」

「タローじゃないんだな」

「そう。タローじゃなくてタロ」

そんな私を多勢の人たちが見守っていた。

我が家を建ててくれた人たちが、近くの工事現場から仕事を放り出して駆けつけてくれたとのことであった。その中には電気工事を監督していた鈴木さんの顔もあった。

「あの時は、犬のことばかり言っていて……」

後になって、鈴木さんに笑われた。また女房は女房で、

「あなたはひろみちゃんの電話で命を取りとめたのよ、タロの話をしていなかったら今頃は……」

と、ことあるごとに言うのである。仔犬の形態から表情仕種にいたるまで、私はこと細かに喋っていたそうであるが、一切覚えていない。

そんなアクシデントがあつて引き取るのが遅れ、タロが我が家に来たのは暮もおしま

った二十九日の夕方であった。

「あら、可愛い顔をしてるじゃない。早速タロが来たわよって、ひろみちゃんに電話しなければ……」

私からタロを抱き取ると、女房はタロに頬ずりして、妙に浮き浮きしていた。これで娘に電話する口実が出来た、そんな顔つきであった。

来た夜ぐらいいは部屋の隅にでも寝かしてやるかと思ったが、女房の強硬な反対にあつて、台所の土間のダンボール箱がタロの仮住居となった。タオルを敷き、毛布で温かくしてやったが、なんだか可哀そうで、

「一晩ぐらいいいだろ」

と言つても、

「癖になるから駄目。はじめが肝心です」

と、一切受け付けない。仕方がないので、タオルの下にトラベルウオッチを入れて寝かせることにした。なぜ時計を入れたかというのと、秒を刻む音が母犬の心音に聞えるらしく

安心して眠れる云々、と何かの雑誌に書いてあったのを思い出して、実験してみる気になつたのである。時計のせいかどうかはわからないが、その夜、タロは案外おとなしく寝た。夜鳴きするでもなく、時間を限つて外に出してやればちゃんと用を走して来るし、その点では手のかからない犬であった。

翌朝、犬を飼おうと言ひ出しながら、面倒は一切見ませんと宣言していた女房が、タロのために粥を煮ていたのは笑止であった。

「私がない時でも、ちゃんと食べさせてやって下さいよ。栄養はあるかもしれないけど、もしドッグフードなんかやるんだったら、あなたも一緒に食べてやって下さいね」
えらいことになったと私は思った。

「それにしてもタロや、お前上品な食べ方をするのねえ、残さないで全部食べるのよ」

「手放して孫をはめるバアさんの心境か」

これ以上いると、なにを言われるかわからないので、嫌味を言つて私はその場を離れた

が、小さい生き物が身近かにいるのはいいことだと思った。お互いに見飽きた顔を突き合わせていると確なことはない。些細なことで不満が爆発したりする。これからは意見の対立があるとすれば、当分はタロに関することに限られるのではないかと私は思ったのである。

大晦日、テレビの画面が『行く年来る年』に変わって、全国各地の名刹古刹の除夜の鐘を流し始めた頃、タロは私の膝の中で眠っていた。いつか外は雨になっていた。

御降りに伊豆の島山明けにけり

寝正月心澄まして雨を聴く

昭和五十三年は雨に明けた。昼近く起き出すと、私は早速台所へタロを覗きに行った。タロは箱の中で丸くなって眠っていた。

「タロ」

と呼ぶと、立ち上っておもむろに伸びをす

ると、まるまった尻尾をバタバタと振った。

「すっかり自分の名前覚えてしまったわね」

絶えず尻尾を振りながら、タロは黒い澄んだ瞳で声のした方を見つめるのであった。

「ひろみちゃん、どうしてるかしら」

「時差が十四時間あるから、そろそろ夜の八時か。年越しのスパゲッティでも食って、もう寝ちゃっているかもしれない」

「まさか」

「気になるのなら、電話してみろよ」

女房の顔がパツと明るくなった。

電話をかけた女房が隣室に去ると、廂を打つ雨の音が一段と強く私の耳に響いて来た。風も加わって、御降りという風流な呼び方をするには、いささか強すぎる降りになって来たようであった。

(御降り——元日に降る雨又は雪に言う。三カ日の間にも言っている。『最新歳時記』)



涅槃会俳談

ほそ だ りゅう ぜん
細田隆善

(東京三好勢至院住職、俳号豊明)

○ 涅槃

ねはん会や皺手合する数珠の音

芭蕉

芭蕉晩年の涅槃の句である。のち芭蕉は「ねはん会や」を「灌仏や」にしたといわれている。涅槃会のつとまる寺にお年寄りが参詣し、数珠をもみ、その音が余生を仏にすがる哀れさとして伝ってくるとの句意である。皺手を写实的にとらえたのがすばらしく、芭蕉は自分自身のことにも想いを寄せたのである。

涅槃は二月十五日、釈尊が入滅された日をいい、その報恩のための法会を涅槃会といい、涅槃は俳句の季題である。涅槃は梵語の *nirvana* の音訳、又はその俗語の *nibban* の音訳であるという。その意味は、火の消えること、滅、寂、寂滅と訳され、解脱、悟りと同義語であるとされている。その意味から釈尊が成道されてまだ肉身のあるのを有余涅槃といい、肉身の入滅されたのを無余涅槃という。紀元前三八三年（中村元博士説）二月十五日、跋提河のほとりの沙羅双樹のもとで入滅されたとき、相對して立っていた沙羅の大木が枝を垂れ釈尊をお

おい、葉の色がたちまち白くなり白鶴はつかくのようになったといわれているところから涅槃を季題では、双林そうりんの夕、鶴林かくりんの林などという。

この日寺院では、涅槃像を安置し又は涅槃図を掛け、『遺教経いぎょうぎょう』を誦して涅槃会を行なう。わが国では涅槃会は、推古天皇のとき奈良の元興寺げんきうじで行われたのが最初



— 涅槃図 (勢至院蔵) —

である。涅槃図には五十二種の諸天、鬼神、禽獸、虫魚などが入滅された釈尊の囲りに集って嘆き悲しんでいる絵が描かれている。

ねはんには仏弟子やみな泣き不動

季吟

世は泣いて迦葉かえつは笑ふ涅槃かな

信徳

土不踏つちふみゆたかに涅槃し給へり

茅舎

傾城けいじやうの拜んで笑ふ涅槃かな

青蘿

灯照らせば微妙音涅槃かな

碧梧桐

涅槃は、お涅槃、涅槃の日、涅槃忌、仏忌などともいい、いずれも季題である。

○ 涅槃会

昔は陰曆二月十五日が涅槃会であり、沙羅の白変に因んでか、不思議にこの日は雪が多いとされている。

涅槃会や花も涙をそそぐやと 素堂
凍る湖かけて涅槃の雪つもる 蕪城

裾野昏れ涅槃の雪の翼張る

義憲

お涅槃のかたきまぶたや雪明り

普羅

雪歇まず昨日涅槃の晨より

月尚

○ 涅槃寺

涅槃像や涅槃図を掲げて涅槃会を修す寺を涅槃寺という。京都の東福寺、奈良の興福寺、大阪の四天王寺、京都の千本釈迦堂はとくに名有であった。

昼燭す涅槃の幅や東福寺

露石

屋根落ちし雪嵩高な涅槃寺

素琴

菊苗にまだ来る霜や涅槃寺

瓦全

○ 涅槃像

涅槃像は木像、金剛仏などであるが、わが国では涅槃図の方が多い。涅槃図のことを涅槃像ともいう。

神垣や思ひもかけず涅槃像

芭蕉

貞享五年（一六八八）四十五歳の芭蕉が伊勢神宮に参排

したときの句である。芭蕉は神宮付近は仏事を忌むとばかり思っていたのに、意外にも涅槃像を掲げた寺があり、ありがたく拝したとの句意であるが「思ひもかけずが」きいている。

天人の肘に泪やねはん像

召波

尼達の古き涙やねはん像

大魯

盗人の返してゆきぬ涅槃像

士朗

ねはん像銭見ておはす貌もあり

一茶

御手のある方に阿難や涅槃像

杞陽

○ 涅槃図

涅槃図は釈尊が右脇面西に伏し、多くの弟子や禽獣が嘆き悲しんでいる絵が、極彩色に描かれている。有名な涅槃図は、東福寺明兆画、三聖寺吳道子画、高台寺顔輝画、大徳寺称栄画、妙飯寺顔輝画、妙覚寺元信画、本法寺長谷川等伯画、法恩寺顔輝画などがある。

涅槃図を掛けんとすなり僧五人

虚子

涅槃図を仰ぐやマスクをかけしまま

かな女

涅槃図の総ては怪を描くなり

瓜人

げぢぢもいて涅槃図絵古びたり

城太郎

涅槃図の歎きの沙羅の枯れ色に

土子

○ 寝 釈 迦

スリランカ、タイ、ビルマその他東南アジア各地方には寝釈迦の巨大な像が安置され、寝釈迦の像に金箔を貼るるのが、信者の篤信であるとされているところもある。

小うるさい花が咲くとも寝釈迦かな

一茶

しろしろと寝釈迦の顔の胡粉かな

虚子

葛城の山 懐に寝釈迦かな

青畝

まんなかにごろりとおはす寝釈迦かな

草城

おん顔の三十路人なる寝釈迦かな

草田男

○ 仏の別れ

涅槃を季題で、二月の別れ、去りし仏、涅槃ねはん変などと
いう。

梟くわうのつらも仏のわかれかな

白雄

人のうへのやうに仏のわかれかな

士由

赤寺あかでらの赤絵がちなる涅槃変

朱鳥

雲に乗り女人も嘆く涅槃変

秋央

○ 餅花煎る

涅槃会の陰暦二月十五日は、二月の望もちの日であり、農事にとりかかる祭りの日であり、農家は暦の上から重要な日である。涅槃の日に餅花という供物を供える。正月に切っておいた餅を供えるのである。又蓬よもぎを入れた団子を作るところもある。この季題を釈迦の鼻糞はなぐというところもあるが、花供はなぐ、花供御はなぐがなまった言葉である。

餅花を煎る匂ひ洩る大薬家

豊明

○ 常 楽 会

涅槃会を奈良の興福寺、法隆寺、大阪の四天王寺などでは常楽会という。常楽とは常楽我浄じょうらくがじやうの略である。釈尊が正覺をえられた四徳を表すもので、常とは常住じやうじゆう不變ふへん、楽とは安楽あんらく、我とは自在じざい無碍むがい、浄とは清浄しやうじやうである。

常楽会東国の旅に出て会へり

遺教経マイクにかかり常楽会

嬰珞の煤紐なびき常楽会

蛇笏

風生

一杉

○ 遺教経会

涅槃会には釈尊が最後に説かれた『遺教経』を誦誦するのでこの季節があり、遺教会、単に遺教、訓誦会などという。京都の千本釈迦堂大恩寺では、『遺教経』を誦読する和文が一般に親しまれ、訓誦会という。また涅槃会を修する寺院では「南無釈迦牟尼仏」と信者が繰り返し唱和することが、涅槃会が親しまれた理由でもある。

ものに恋ひさめぬ寝耳や遺教経

声ばかり千本の松や訓誦会

青々

通理

○ 涅槃西風

陰暦の涅槃会のところ吹く冬の季節風の名残りの西風を涅槃西風といい、寒さが戻り、季節となり涅槃風、涅槃吹くともいう。又暖い西風をいう地方もある。伊豆、鳥羽あたりでは、船詞として使用されている。このころか

ら日増しに暖くなるので、西の浄土から現世への誘いの風としてこの名がある。

自転車に括られ鶏や涅槃西風

涅槃風廃墟にできし砂の類

人にたよる心の躊躇涅槃西風

干竿に主婦が嘆きや涅槃西風

役牛の俯向きあるく涅槃西風

楊童

草田男

一鳴

友二

潮

◎ お 願 い

諸物価の高騰、及び郵便料金の値上げにより、弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、やむをえず値上げ変更することになりました。昭和五十六年四月一日より、新しい年会費でお願いいたすことになりました。詳細は、来月号以降の誌面にお知らせします。

法然上人讃仰会

村瀬 秀雄 著

|| 新刊 ||

『和 訳 六 時 礼 讃』

善導
大師

B 6 判 二六五頁 価二四〇〇円

|| 好評 ||

『和 訳 觀 經 四 帖 疏』

善導
大師

B 6 判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 法 然 上 人 選 択 集』

法然
上人

B 6 判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 浄 土 三 部 經』

B 6 判 四七四頁 価二五〇〇円

取扱い 法 然 上 人 鑽 仰 会

|| 新刊 ||

総本山知恩院
大本山増上寺
大本山善光寺大本願

布教師 小布施弘学著

『伝 統 の 変 容 と 進 化』

— 仏教的視点より現代人への提言 —

○難解な仏教の教えを、新しいセンスで分りやすく説いた待望の布教書。篤実なる伝道者小布施師の名調子が、一氣呵成な筆致で展開される。
すでに三版を重ねて、好評発売中。

B 6 判 二二〇頁 価一五〇〇円

(平二五〇円)

(申し込み先)

〒381-12

長野市松代町東寺尾三八八一

長 明 寺

振替(長野)一四三二二



連載法話

第五回

両足尊し

おぶせ こうがく
小布施 弘学

(長野市長明寺住職)

仏教入門の儀式に「三帰」——仏法僧の三宝に帰依する文がある。即ち、帰依仏両足尊、帰依法離欲尊、帰依僧衆中尊である。

帰依仏両足尊とは、阿弥陀仏の慈悲の左足と、智慧の右足を、私達の両手に頂戴してお敬いすることである。阿弥陀仏は、慈悲と智慧の両方の、み足で、世を救い人を助けに歩かれるのである。「歩々清風起」——仏の歩かれたあとには、たとえようもないすがすがしい佳き香りが漂うのである。

「仏法ひとり弘まらず、人によって弘まる」と言われるが、どのように尊い教えが開かれていても、それを説

いて歩かなければならない。教化の生命は足である。

天台大師は「智目行足到清凉地」と言われたが、理想の世界に行くためには、正しい智慧と、たゆみなき実践の足が必要な条件である。どんなにそこへ行こうと思っても、足がこの私を運んでくれないければ行くことは出来ない。

私は十一月中旬頃より両膝が痛み出し、寒さに向って、辛い思いをしている。八〇キロの巨体に重い荷物をもって歩いて来た伝道四十年、足を過酷にあつかって来た。健康でとび廻っている時は、足の存在すら忘れていたわることもしなかった。少々足が痛み出すと、非常に

不自由を感じ、今更ながら足の有難みを思うのである。

人間は何ごとも、苦しい目にあつてみなければ今日の幸わせが感謝できないとは、全く愚かしいことである。

今私達には、多くの恵みを与えられておりながらそれに気づかず徒らに不平をこぼし、また、他人より羨まれている点を現に持ちながら、それを意識せず不満をかこっている鈍感者なのである。

ある人の遺した、

「満足すれば下り坂だ、常に満たされない今を喜べ」の警告が胸を打つ。「煩惱深無底」といわれる凡夫の欲望は、涯しく底なしの泥沼のようなものである。従つて私達は、常に不満と不足となえて、心安まる時がなく、欲望の追求に二度とかえらぬ尊い人生を浪費して止まない。

栗生光明寺の王山上人は、

こと足れば 足るにまかせて こと足らず

足らでこと足る 身こそ安かれ

と詠っているか、このすがすがしい心境に私達を導いてくれるものが仏の教えである。

京都竜安寺の石庭は知らない人はないが、あの方丈の

小さな庭にある「吾は唯足るを知る」の水鉢を見落している。

おのれ自身の心の安らぎは、先づ知足——足るを知ることである。それには、自分には必要な、そして、求めてならないものを欲してはいけない。「識分知足」おのれの分を識つて、正しく欲することが大切である。このことを弁えないがため、今日様々な犯罪事件が発生している。自分の立場を考えた時、たとえ空腹の面前に美肴珍酒があつても、口にすべきではない。

自由の思想によつて改善され向上したところの点多くあるが、ひるがえつて、これがために、反つておのれを見失ひ、節操を破り、牢獄につながる人の多くなつてきたことである。

不足を忍ぶことは辛いことも知れない。然し、忍耐、辛棒、慎しみを忘れてしまつては、人間としての分を忘れたことであり、それは人面獣心の徒輩といわざるを得ない。

そこに「少欲知足」の必要が生じてくる。「少」とは慎しみである。「衣食足つて礼節なる」の道徳規範より「道心に食あり」の宗教規範に目を向けねばならない。

戦後三十数年、産業の高度成長によって、私達の衣食住は豊かになり満ち足りた境界に入ったが、果して礼節が尊ばれるようになったであろうか。かえって礼儀節操は乱れる一方ではないか。これは、物によって心は養われないという証拠にはかならない、むしろ、心によってこそ、物は約束されるのである。心ある人間として慎しみ深く生きる者を天は餓死させる訳はない。

戦中戦後、物の買い漁りの醜さと不道徳を知り尽した筈の日本人が、オイルショックが起きるや、トイレットペーパーの買い占めに狂弄する姿に、人間の浅間しさと、救いようのない業の深さを感じるものである。

知足―足るを知るためには、正しい知恵の心をもたねばならない。そして「共甘共苦」の慈悲心をもって、おのれ一人の安穩を念じてはならない。自分一人が生きのびて、多くの人々が斃れた前において、おのれの生の喜びを感じるならば、それは既に人間でなく悪魔である。

私達が、心ある人間として生きる道は、仏道でなければならぬ。そしてめざす世界は、三悪道(地獄・餓鬼・畜生)ではなく、仏によって顕現され、証明された浄土でなければならぬ。この世界は、おのれ一人の安住の

地でなく、すべての人々と手をたづさえていくべき(共生極楽成仏道)ところである。

そのためには、今日の歩みに正しい判断(正見)正見によって相互同情の営みが必要である。願共諸衆生往生安楽国を標榜する私達が、利己主義であってはならない。

人の痛さを、おのれの痛さとして身に感ずる慈しみの心こそ、この世に処する大切な生き方である。

足あとの 残らばのこれ 足あとの

消えなば消えね われは旅ゆく

自分が社会に示したこと、他人にしてやったことが、認められなくとも、感謝されなくともよい。自分が世のため、人のためにと祈りつつ働いて来た歩みのお蔭で、ここまでたどりついた事実が嬉しいのである。だからここまで歩いてきた足あと(功績)など問題ではない。

自己中心で生きてきた者と、利他をモットーにして歩んできた者とは、たとえ到着した時と処が同じでも、その生き方(歩み方)は雲泥の差である。彼をして歩かしめたものは、仏心を奉戴した慈悲と智慧の両足である。

誇らぬ心、妬まぬ心、争わぬ心で歩む道は、牛歩に似ても、兎と亀の競争における兎の愚ではない。一步一步

が仏道であった。

仏道を歩むものは、ミクロ（微視）でなく、マクロ（巨視）の觀察が出来なければならない。物質的、表面的な、ものの見方から、精神的、核心的な、ものの観方になることである。前者は、他人の欠点をめざとく咎めて、その人の内なる良さに盲目的な人であり、後者は、他人の欠点をみて、おのれにも所有せるものと判断し、それを咎めず、人のふりみてわがふり直すことに心がけ、その人の内に秘めたる良さを敏感に知る人なのである。

ただみれば なんの苦もなき 水鳥の

足にいまなき わが想いかな

水の上をなんの苦勞もなく、浮んで流れていく水鳥だと見ることは、余りにも皮相的であると共に、人間として浅はかなみつめ方である。水中でどれほど彼が両足でまがき、苦勞しているだろうかとそれに思いを馳せることが、智慧の眼の開いている者の観方である。

私達は浅い学解と、未熟なる経験を基として、世間を論じ、人を批評すべきではない。私達にははかり知ることの出来ない深部がどれ程の原因があるかを考えてみる謙虚さが必要である。

相互にその立場を察し合い「われ若し、彼の境遇だつたらどうしようか」と、それを先ず考えることが心ある人間同志の生き方である。

今日、世界は危機に瀕しているといわれるが、仏の兩足の徳を頂いて「一切衆生悉有仏性」と「平等施一切」の教えを、世界人に知らしめ、守らしめていく以外に救いの道はありえない。戦争の罪惡と、原爆の悲惨さを身をもって経験し、戦争放棄を世界に宣言した日本の態度と今後の行動が、世界中の民族より見つめられていることを強く銘記しなければならない。

平和になれた退屈から戦争という刺激を求める一部危険な風潮を恐れるものである。

四ッ足で歩いていた私達が、慈悲と智慧の兩足を大切にしっかりとつけて、理想の天空に兩手を挙げて立ちあがった人間発生の原点を考えてみる必要がある。それが折角、挙げた兩手を、再び大地につけて四ッ足（三惡道）に戻ろうとしている現状に大きな危惧を感ずるものである。

念仏は、慈悲と智慧の心を養う信仰であり、世界に平和を、人に安らぎを与える唯一無二の宗教であることに、自ら信じ、他に教えて信じさせねばならない。

〈随想〉

ほとけとの出会い (十)

佐 隆 三
さ たけ りゅう ぞう
竹 隆 三

(大正大学教授・医博)



ベルグソン (H. Bergson) が時間を時刻 (temps) と持続 (durée) とに分けて以来、時間には、時計で計測される客間的時間 (物理的時間) と具体的に体験される主観的時間 (心理的時間) の二つがあると考えるのが一般的であります。しかし、この時間の二つの形式は決して一致することではなく、実際に体験された時間は、人間のその折々の心理的状态や感情、気分などに左右されて、時計の進行に相当するよりも、ときに生より長く、ときにはより短かく感じられるのであります。

体験された時間の測定された時間からの偏りは、

避けなければならない主観的な誤りではなく、逆にむしろ「体験される時間」はわたくしたちが現実生きている時間であり、それはわたくしたちにとって根源的な実在であります。

ボウマンとグリュンバウム (Bouman und Grünbaum) は、前述のベルグソンの「持続」を Chronognose (知覚時間) と Chronologie (体験時間) との二つに分け、「時刻」に相当するものを Chronometrie (計測時間) と呼び、時間を三つの形式に分類しましたが、これは妥当な見解と思われまます。

最初のクロノグノジー (知覚時間) とは、「身体時

間」とも言うべきもので、例えば一切の視覚や聴覚などを遮断した暗黒の防音室のなかにわたくしたちが置かれたとしても、呼吸や脈搏や空腹感などによって「時の経過」を認識し、判断することができるのでありますが、このような身体的・生理的な知覚によって直覚的に感じられるような時間のことであります。

また、ハイデガー (M. Heidegger) の指摘を俟つまでもなく、希望や恐怖や計画のなかに現在の時間における未来の関連が含まれ、また想い出のなかに過去もまた瞬間に現在している——という豊かな内的分節が時間に生あるのであります。

「時間とは何か」という哲学的問いに対して、聖アウグスチヌスは考えあぐんだすえに、次のように告白したことは、あまりにも有名であります。

「誰かが自分に時間についてたずねなければ、わたくしはそれを知っていると言えるが、誰かにそれを説明しようとするれば、自分はそれを知らないという事実を認めなければならないだろう。」

時間について、多くの人が納得できるような重要な観念は数多く存在するでありましょうが、時間は、説明を求められない場合にのみ、確かにそれによってなにが意味されるかを完全に理解し、直観的に分るとわたくしたちに感じさせるような一種奇妙な性質を備えています。だが、わたくしたちは時間についてそれ以上にも理解していないのであります。

「時間」とは、わたくしたちにとって自明なもののようにありますが、よく考えてみますと、実際に時間そのものは実はとらえどころのないものであり、結局のところ時間は直接の認識の対象にはならないのであります。物の変化があるから時間があると思うのであって、物の変化に先行して時間が存在するのでありません。物の変化をわたくしたちは時間という範疇 (在り方) で認識しているだけであると言ふべきでありましょう。

意識の流れが止まってしまえば、そこには時間の

認識もなくなりませんが、意識の変化によって時間が成立する——つまり、時間は意識に即してあるにしても、それは明らかに意識をこえた存在であり、決して意識から生ずるものではないと主張することは正しいと思います。

しかしながら、極楽浄土で常に若さを保ち、老いることも病むこともない人々、あるいは悟りを完成した人びとにとって、はたして時間があると言えるでしょうか。

時間は死と直結するものであり、わたくしたちにとって切実な時間は、自らの死によって限定されている時間であり、ミンコフスキーのいう「生きられる時間」であります。時間は死によって限定されているのでありますから、死が近づくにしがって、この時間の貴重さがより深く、より痛切に知られるのであります。

わたくしたちは、一般に時間を止まることなく流れてゆくものとして、素朴に捉えています——もともと時間がこのように直線的に発展するものという観念が生じたのは近代になってからで、ほとんど

信じがたいことのようにありますが、今から二、三百年以前の文明社会においてすら、時間は本質的に本来循環するものと見做される傾向があったことは事実であります——そこには、存在を不可避的に変化せしめてゆく「力」が想定されます。

仏教では、この力を「無常の力」と呼んでいます。が、さきにも述べましたように、無常はしばしば「死」によって示されております。

ところで仏教では、時間はどのように考えられているのでしょうか。

仏教における時間の研究は、わたくしの理解した限りでは、究極のところ無常の研究ということになると思われまゝ。しかし、ここで言う「無常」とは、わが国の中世文学以後に顕著に見られるような「もののあわれ」や「はかなさ」などによって代表されるような情緒的、感性的な無常ではなくて、インド仏教におけるような、きわめて論理的な性格のものが問われているのであります。

時間を正しく知ることのなかに迷妄の解決

がある——と言われていますが、そこには、動くものと動かないもの、無常なるものと永遠なるものの二つが、わたくしたちの認識の内容となっていることを注意しなければなりません。

わたくしたちの認識は「意識の流れ」である点から言えば、認識は時間的であり、無常であります。しかし、その無常なる認識において、永遠が認識されるのであります。たとえば、「法則」とか「真理」というものは、決して無常ではなく、それは時間を超えております。

仏陀の悟ったニルヴァーナ(Nirvāṇa涅槃)は永遠であると、仏教はわたくしたちに教えます。

仏教では、認識の対象を、有為法(時間的存在)と無為法(超時間的存在)とに分けていますが、「もの」を「法」と呼んだのは、ものが無常でありながら、しかも永遠性をそなえていると見たからであります。

アビダルマ仏教では、「有為法」と「無為法」とをはっきり分けて問題を取り扱っていますが、大乘仏教では、両者を即一に見るという立場をとってい

るように思われます。

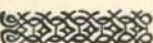
仏教が存在よりほかに時間を独立の実体として見なかったことは、有部(説一切有部)の「存在の一覽表」(七十五種の存在)の中に、時間が全くふくまれていないことにもうかがわれるのでありますが、有部とはほぼ同時代にインド哲学の学派を形成したヴァイシェーシカ学派(Vaiśeṣika勝論学派)の「実体、属性、運動、普遍、特殊、内属」の体系において、第一の実体(九種)の中に時間をふくめており、勝論学派は時間を実体と見ていたのであります(金倉円照『インドの自然哲学』を参照されたい)。

無為法——虚空(絶対空間)、択滅(涅槃)、非択(緣欠不生の法)——滅は時間とはかわりのない存在でありますから、これを除外するとして、有為法のみについて言えば、存在がそのまま時間であるといつてよいであります。

このことは、『俱舍論』に注釈を加えた普光の『俱舍論記』のなかで述べられている彼の時に關しての考察(時に別体なし、法に約して以て明かす)からも明らかであります。

(つづく)

浄土句集



一田牛畝選



溪全体が紅葉して、誠に天下の絶景の中に、恩讐一体の物語が秘めている。

秋晴の縁に干したる能荷

福岡 服部 光代

極楽はかくやと念仏日向ぼこ
福岡 荒牧 還愚

評 奈良大仏の落慶法要は紙散華が秋天に
きらめき、高く聳ゆる鴉尾を仰ぎつつ大
仏殿にひれ伏せば法悦の極に。

東京 吉田ゆきえ

起きぬけの日課となりぬ落葉掃き

福岡 林 澄山

仏縁の朝餉さやけし五観の偈

福岡 原 敬二郎

評 日向ぼこしていると、ついうとうとな
なり、極楽もかくやと思う気持となり、
思わずに口よりお念仏が出て来るのであ
る。

故郷のなき淋しさや曼珠沙華
東京 田中 秀代

患者等に代り平癒の初詣

福岡 高良 幸代

湯の滝の音に更けゆく秋の宿
東京 真野 竜

評 古里に孫達を連れて曼珠沙華の畦道を
走ったり柿をちぎったりしていて楽しい
のその古里のに無いことは淋しく、都塵
をのがれて田舎の甘い空気を吸いたいの
である。

耶馬の秋青の洞門さぐりけり

東京 栗原やえ子

評 紅葉狩して泊りし宿は温泉の滝落つる
静かなところで、疲れし足をゆっくり伸
して湯治の夜長の楽しくて。

溪紅葉仰ぐ禅海和尚の碑
福岡 高良 慈風

鮎龍に白水引を楚々と活け

東京 真野よし子

天高し鴉尾のきらめく東大寺

三重 山田 うた

評 耶馬溪の青の洞門を仰げば、禅海の二
十六年間の難行苦勞の碑が建っている。

廃駅の葉鶏頭ただ燃えてをり

東京 猪瀬 幸子
穂芒の絮に触れたき旅心

東京 細田 初枝
墨絵めく連山遙か冬霞

山形 松田 允子
かけられし梯子濡れいし子守柿

東京 吉原登起子
なめらかな高原の道薄紅葉

福岡 権藤みきを
欠け毀つ野の仏にも菊の供華

福岡 行正一如子
秋景色白内障の眼にぼけて

東京 新井 新生
すくすくと伸びて芒の穂のそよぐ

東京 鈴木 葉子
この先は小さき杜木の実踏む

福岡 上滝津弥音
あいあいの寄鍋好きなもの掬い

京都 安藤 寛
百年経つ供養の重箱十夜かな

東京 栗原とも子
朝顔の枯れつつもなお花咲ける

大分 丹羽 難中
十夜仏祝う赤飯けんち汁

福岡 安藤平次郎
つつがなく予後の旅終へ冬ぬくし

東京 小笠原香祥
発車ベル色鳥斜め横切りし

福岡 行正 明弘
世話方は庫裡を陣取る十夜かな

山口 上野 明達
称名のはく息白し加行僧

東京 末常てる子
静けさの秋の夜空に星一つ

福岡 国友 星畝
着ぶくれてうなづく法話死刑囚

群馬 島津 か寿
冬紅葉山ふところの出湯の宿

三重 森 静枝
落葉たく庭ひろびろと掃かれけり

福岡 前田 秀峰
双盤に合せ十夜の長念仏

埼玉 佐久間愛子
増上寺朱の大門又紅葉

福岡 稲永 新
十夜諷誦十三回忌の妻のため
授かりし余生大事に二日灸 一田 牛畝

表紙のことば

「白水仙」

多くの樹々もまだ裸かで草の芽も固く枯葉の下にうずもれて凍霜に耐えている頃、自然の中で群芳にさきがけて花開いているのは梅と水仙ぐらいだろう。直線的な枝々に花をつける梅を古武士的と評するならば、水仙は厳しい環境にもめげず踏み耐えている女の勁さを秘めた優しさに比べられないだろうか。

緑の剣葉のどこかふっくらした線にも細い花梗にかっちり開いた清楚な六弁の雪白。中に黄金色の蕊を蔵して一茎必ず白い袴をつけて、裾を乱さぬ身嗜みにも凜とした女性の姿を想像する。

土屋 正男

戦前は都鄙を問わず男が二十歳になると三年間を男ばかりの兵隊屋敷で軍事訓練に明け暮れた。この荒らくれ達の悲喜の折々に思い浮ぶ故郷の彼女は、「水仙の花よりきれいな花子さん」なのである。猥雑な歌詞の連らねの中で牡丹でもバラでも良さそうなのに、好きな人の姿を水仙と比べるのは誰もがこの花の持つ言い難い美しさを感じ取っていたからだろう。華やかではないが可憐で、それでいてピシリと決ったところを持つ花である。

水仙にはいろいろな雅やびた名前がつけられている。白い花弁の中央に黄色い盃を載せ

たような形から「金盞銀台」といい、雪の中にも花を開くので「雪中花」ともいわれる。

昔、中国に姚姥という文才優れた女性が、夢に星が隕ちて一叢の水仙となった。その香が芳しいので摘んで食べたとみて眼が覚めたが、一女を生んだ。その娘がまた文才有り、観星女吏といったが、それから水仙を「女史花」と呼ぶようになったという。

ギリシヤ神話ではナルキッソスという美少

年が多く、女性に思いをかけられたが受け入

れず、水に映る自分の姿に恋いこがれて死に、水仙の花になったという話がある。ナルチンズム（自己陶醉）はこれから出たと言うが、この水仙はきつとラッパ水仙だっただろう。白水仙では相応しくない。

白花の外に黄水仙も八重咲きもあってどれも好ましいが、どちらかと言えばやはり白水仙だろうか。

◎『浄土』表紙版画販売についての一案内

好評の『浄土』誌表紙版画は、土屋正男先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

（申し込み先）〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―一六

法然上人鑽仰会 振替（東京）八―八二―一八七

特 別 寄 稿



アンコール・ワットSOS (二)

—倒壊の危機に直面するアンコール・ワット—

いし ざわ よし あき
石 沢 良 昭

(鹿児島大学教授)

一、輝やかしい歴史展開

東南アジアには、紀元前からインド人が来航していたが、こうしたインド世界との交流は時間と場所を限定せずにとつと続いてきた。その結果東南アジアの沿岸地域ではインドの諸文物を受容した自成的な地域集団や小国が誕生してきた。現在のカンボジア南部の沿岸に、こうした諸条件のもとで中国史料にいう「扶南」国が紀元一世紀ごろ興起したのであった。やがてこの扶南は、六世紀にトンレ・サップ湖周辺に進出してきたクメール「真臘」に併合されてしまった。この真臘も水真臘と陸真臘の分裂と再統合を経て基盤が固まり、九世紀末に現在の

アンコールの地に都城を造営し、輝やかしいアンコール時代を迎えるのである。アンコール王朝は、約五五〇年にわたりそこに行政府を置き、数百の祠堂・寺院や大伽藍を次々と建造してきた。最盛期にはインドシナ半島のほとんどを版図する大国となり、王都付隣には約二〇万人が居住していたといわれる。

二、アンコール文明の宇宙観

—遺跡建設の背景—

当時の華麗な大都城アンコール王都は、一四世紀から数次にわたりシャム（現在のタイ国）侵攻を受け、一三五二年には王都が陥落し、焼討された城内は数日煙炎が続

いたという。数百年にわたり蓄積した富財と大量の人員を失なったアンコール王朝は、それからは衰退の一途をたどり、一四三二年には王都が放棄された。やがて密林



—アンコール遺跡調査団と
カンボジア側警備隊—
(1980年8月22日撮影)

の中に埋もれ、一八世紀末からは旧都のアンコール地域はシャム領となり、忘却されてしまった。熱帯の高温多湿な気象条件下では、石造の寺院しか残存しなかった。しかし、これら壮大な建造物からは、往時の繁栄、高い文化、優れた芸術を推察することができる。

アンコール遺跡は、大規模な宗教遺跡であり、クメール民族の長い歴史的結晶と篤信の所産にはかならない。これら遺跡の特徴は、空間の調和を見事に実現した独自の建築様式と美術手法に見られる。遺跡のタイプは二種類あり、平面に展開する「祖寺」タイプ（プリア・カン寺院）と、四辺形が多層基壇上に祠堂を配置したピラミット型の「山岳寺院」タイプ（アンコール・ワットなど）がある。前者は祖先崇拜に端を発し、祠堂で礼拝される神像や仏像は、故人の名前と神の名前を合成した名前を持ち、特定の個人を祀った偶像なのである。後者は、王が神の化身＝神王と考えられ、寺院の頂上には神が降臨していると思われる。

アンコール王朝の諸王は、寺院の建設を王権の神格化と結びつけて独自の世界観を地上で具現しようとしていた。幾層にも積みあげられた山岳型寺院は、世界の

中心山須弥山を、城壁は連延する崇高なヒマラヤの山々を、濠と大池は深く無限なる大洋をそれぞれ象徴化したものであった。こうした中心寺院、長い城壁、環濠と大池、東西南北に走る基軸道路、府内の王宮と諸寺というアンコール王都の基本構造は、神・仏の顕在を表象し、同時に王権の神格化、つまり転輪聖王（チャクラヴァルティン）の棲む金殿玉楼を意味し、地上におけるクメール人の宇宙観を具現したものである。

クメールの諸王は、登位すると直ちに現人神としての王の權威および死後の墳墓を兼ねる大都城の建設を希求する。しかし、騒乱・蜂起などの頻発する混乱、衰退期に登場した王は、国内平定に時間と富財を使い果し、小寺院や祠堂だけしか建設できなかった。時流に乗って最盛期を創り出した王は、アンコール・ワットやアンコール・トムの大伽藍と大王城を建立できた。これら伽藍か寺院は、一握りの権力者のために建設されたものではあるが、その当時の最高の建設技術と美術手法を駆使し、全国の村々から人々を徴用し、国の総力を集積して建造が進められた。こうした総動員による大工事は、二〇年とか、三〇年にわたり行なわれるが、それは同時に人々

を窮乏に追いこみ、国全体を疲弊させてしまう。アンコール・ワットはスノリヤヴァルマン二世により一一五一年ごろから約三〇年かかって建設されたが、治世末期には反乱が起り、次代の王がはつきりしないほど国内情勢が混乱していた。

三、アンコール・ワット 稲田化

私たち調査団（私と日本電波ニュース社記録班六名）は、昭和五十五年八月九日早朝シエムリアップ市内からアンコール・ワットへの道を急いでいた。両側から繁茂した密林がかぶさるような平坦な道、自動車で走ること十分に、やがて遠くに、ちょうど高い樹木の梢あたりにアンコール・ワットの尖塔が見えてきた。いよいよ待望の十二年ぶりの参詣がはじまろうとしていた。心躍る胸の高まりと共にあの砲弾形の塔堂の偉容が視界に入ってきた。シエムリアップ市内からの道は、アンコール・ワットの南側にぶつかり、その環濠の縁辺に沿って西正面へ廻わるようになっていた。近づいてみると、あの幅広い濠（幅一九〇メートル）がなくなり、囲わりの景観が一変していた。以前のアンコール・ワットは、環濠に清澄な



—アンコール・ワットの破壊状況を
撮影する記録班—

水をたたえ、大空をつき破るような高い尖塔が水面に映っていた。狼狽しながらよく見ると、濠が埋められたわけではなく、旧濠内は一面が稲田となっていた。カンボジアでは三毛作が可能であるが、この目の前で見た初穂は雨季が始まる五月に耕種されたものであろう。ボル・ポト政権下では自力更生政策に基づき、食糧増産が強行されたが、この濠までを田地に転用するとは狂態としかいいようがない。

アンコール・ワットは濠（一・三キロ×一・四キロ）高さ三メートルの周壁、東西に走る参道、一・五キロにも及ぶ三重の大廻廊、本殿の五基の塔堂というように、その規模が途方もなく大きい建造物であり、同時にそれぞれがクメール世界観の大道具を象徴しているのである。環濠を水田化したボル・ポト政権は、その国旗にアンコール・ワットのシルエットを用いていたが、自分たちこそ現代のスノリヤヴァルマン二世と錯覚したのであろうか？ 不可解な増産至上主義といわねばならない。

四、救いの手待つアンコール・ワット

私たちは旧濠の縁辺を西正面に向かって車を走らせた。

そうした外観の変貌に仰天しながら、西参道から境内に入った。そして、約十年間放置されたままの遺跡の細部をつぶさに調査し、その現状を石垣巳佐夫カメラマンがビデオ・テープに撮影した。この映画フィルムは、アンコール遺跡が発見されて以来、初めての詳細な生の記録資料であり、時間にして十八時間分のフィルムがまわされた。アンコール・ワットの破壊は、ボル・ポト政権下での濠の水田化、仏像粉砕、浮彫・壁面の機銃掃射など人為的な損壊に加えて、自然破壊の猛威を検証することができた。アンコール・ワットをはじめ諸寺院を蝕んでいる凶器は雨水、バクテリア、植物である。

シェリムリアップ地方の降水量は、雨季の九月が二七四ミリで最も多く、年平均一四六三ミリの降雨がある。アンコール・ワットの内壁、基台、礎柱などは、床から〇・五メートルほどの部分が匱状にえぐりとられ、細くなっている。これは雨水が砂岩質の石材を蝕壊し、鱗剝作用で石表面がボロボロになり剥げ落ちている。この原因は雨季に雨水が毛細管現象により石材に浸透し、ちょうど匱状剝離部分のところまで上昇したところで、乾季となり、灼熱と直射日光により外側から干し乾かされ、

石材を風化してしまうのである。礎柱などは屋根や上部の垂重に耐えかねて倒壊してしまう。こうした雨水による自然破壊が遺跡全体にわたり進行している事実をフィルムに詳細に収めてきた。

次に、バクテリアが石材に付着して、腐蝕している。これは硫黄系のバクテリアで、特に灰色砂岩がこれに蝕ばれている。

遺跡のほとんどは、深閑とした密林に囲まれている。高い樹林は、遺跡を直射日光から守り、付近の湿度や気温を一定に保ち、極端な蒸発を妨げている。湿気は、石材や壁面の裏側に苔、地衣類、藻類の植物を繁茂させているが、石材そのものを浸蝕することがなく、これはむしろ石材を保護する役目を果たしている。植物が凶器となるのは、遺跡の上に若芽を出した榕樹（ポアン）（カンボジア語でスボアン）系の樹木である。この樹木の根は強靱で、どんな狭い間隙にも触手を伸ばすごとく潜りこみ、徐々に石材を動かしながら、数年のうちに根茎が太くなり、やがて大木に成長していき、根が遺跡の縦横に張りめぐされ、遺跡全体を縛りつけてしまう。そうした榕樹を乗せたかっこうの遺跡は、その重量に耐えかねて倒壊してしまう。



念佛ひじり三国志 (全)

——法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

光堂における明遍の生活秩序は大幅な改変を余儀なくされた。

これまでは、日中を気ままに暮すことが出来た。思いつくままに経巻を拾い読んだり、居眠ったり、時には街へさまよい出てあてどもない散策を楽しんだ。

それもこれも、夜の静寂な時間への準備であり、エネルギーの蓄積であった。

夜が更けて、すべてが寝しずまると明遍は燈心をかきたてて「三論玄義」と取り組むのである。

「三論玄義」は唐の嘉祥大師吉蔵で撰した述作である。吉蔵は六世紀の前半に現れた学匠でその訳経、解説をとおして広く大乘仏教を紹介した。法然が「偏依善導」と敬慕した善導は幼き日その門中だった、と伝えられている。

三論義を学んできた明遍は、近ごろ浄土門への傾斜を深くしている。この両義の冥合は当然の命題となるであろう。明遍は吉蔵の「三論玄義」を読み返しつつ論註の

筆を加えはじめたのであった。言ってみれば彼の仏法者としての大成をここに求めようとしていたのかもしれない。

ところが頭脳が隅々まで冴えわたり、気力も集中するだじしな夜陰の時間帯を奪い去られてしまったのである。

光堂には若い松虫、鈴虫という尼僧が同居している。日中はともかく、狭い堂内で夜も共にするわけにはいかなかった。

夕餉の膳を若い番僧が光堂へ運んでくると、明遍は本坊へ去ってゆかねばならない。そちらで夕餉を済ませると、修業僧たちが起居する広い殿司の一隅に坐りこむ。屏風をめぐるせ区切つてはあったが、やはり落着かなかった。夜が更けるにつれて、「三論玄義」は千々に乱れる。屏風の向う側で眠る修業僧たちの寝息が気になる。頭上にひろがる共有の空間がわずらわしかった。

貴家育ちの生活習慣がいまだに明遍から脱色していなかったようである。求める孤独にはつねに贅美がまつわりついていた。

ある夜更けのことだ。若い修業僧の一人が突然、夢遊

病者のように明遍の背後に立った。光堂へ食膳を上げ下げにくるあの番僧だった。

「どうした?」

明遍は「三論玄義」から視線を抜いた。

「明遍さま、これをごらんになって下さい」

番僧はおのれの着衣を指さした。悲しげな眼つきだった。

「粗相をしたのか」

「夢を見ました。まちがいなくあの松虫さまと鈴虫さまでした」

「松虫と鈴虫とが……」

「はい。お二人が現れて、わたしを手ごめにしたのでございます」

「手ごめに?」

「わたしはかつて一度もあの方々に姪らな気分を寄せたことはございません。にもかかわらず夢の中に現れて……」

「わたしは……」

少年は「夢精」を犯したというのだった。

明遍は仰天した。少年僧の「夢精」そのものに、ではない。丁度同じような事件を「三論玄義」で読んでいた

ところだったからである。

——余人染汗衣

この偈文そのものではないか。

「三論」とは竜樹の「中論」及び「十二門論」と提婆の「百論」を基礎にして説いた学説であり、それを信奉したのが三論宗である。提婆は竜樹の高弟で、「百論」のなかで異端邪説の排斥につとめている。

さて余人染汗衣とは、この提婆があるとき不浄を犯して着衣を汚した。だが提婆は弟子どもに語って「自分は阿羅漢であって、不浄なぞあり得ない。この汚染液は天の魔女が自分をおとし入れる目的で汚したものだ」と、たばかった。だから余人が衣を染汗した、というのである。

この言葉には虚と実とがふくまれる。自分は阿羅漢でも何でもない凡夫である。この凡夫であることは「実」だ。弟子どもをたぶらかし魔女のせいにしたのは「虚」である。でも天の魔女が羅漢の着衣を汚染させるのもまた「実」であり、羅漢自身の失態ではないかもしれない。となると羅漢を凡夫とするのは「虚」ともなる。

この虚実が両部にわかれて、仏法の人間観は上座部と大衆部となったと説く。

「お前だったな、東山へいって専修念仏の仲間へ加わりたいと申したいのは」

「はい……でもそんな勇氣も今はくじけてしまひそうです」

少年僧はじつとおのれの着衣、裾前に視線を落した。若い体液で濡れたシミがいきたくない図柄をのこしている。

「外へ出よう。他の者の眠りをさまたげる」

明遍は立ち上がった。少年僧も黙ってついてくる。

正月の夜更けだ。星がばらまかれ風もなかったが、えぐるような冷気が大地から這い上がる。明遍たちは歩み寄った光堂の周囲を、ぐるぐる歩きまわった。身体を動かしていないとこの冷気に耐えられない。

「お前は此処で眠る二人の尼僧に淫らな気持を全くいだかないと言った。気持ではないだろう。だがお前の若い身体は求めているのだ」

「……」

「若いからではない。このわしだって、いい年をして無

〈松虫・鈴虫幻想〉



性に欲しくなるときがある。わしらには目や鼻がついて
いる。目は物を見てしまう。鼻は匂いを嗅ぎ分ける。好
き嫌いの気持とは関係なしにだ」

「それで……」

「わしらはそんな自分を、まともから見つめねばならな
いのだ。夢の中に現れた女人を、天の魔女などとゴマ化
してはならない」

「それで明遍さま。わたしは今何をしたらいいのです
か」

「そうよ、のう……」

三論の「論」が、この現実によく役立たぬどころか、
有害な遊戯ですらある事実には明遍は気づかされる。

なおも歩きまわる。少年僧はただ無心に追隨する。

光堂のま裏へ出た。

明遍は立ち停まった。脳裏を一瞬、ある情景がかすめ
た。淀の船中だ。丹後局の横になった姿態が思いうか
ぶ。

「婚ばおう」

「えっ」

「これから二人で、婚ばってゆくのだ」

「明遍さま」

少年僧の声はふるえている。

明遍は裏戸へ手をかけた。この板戸一枚をはずすのは
雑作ない。夜陰になって他出から戻ってくる折の通用口
だったからである。

すでに燈心を落し、堂内は闇だった。ただ、はずされ
た板戸の空間からさしこむ星明かりが、かすかな光りの
円ろみを室内にえがいた。

松虫か鈴虫か、どちらの女人であるか定かではない。
枕を並べた一人が物音を聞きつけて白い上半身を起きあ
がらせ、侵入してくる明遍たちをじっと覗きこんでい
る。

「明遍じゃ。婚ばってきたぞ」

恥らいも、うしろめたさもない声で、明遍は快活に叫ん
だ。

二

もう一人の女人も身をはね起こした。

しかし、どちらも声を発しようとはしない。相手が光

堂のあるじ、明遍僧都と知って安心しきっているのか。あるいは犯されてもかまわぬと覚悟をきめてしまったのか。

明遍は右手に取りすがってくる少年僧の体温を感じた。肌は焼きつくようだったが、手の甲も指先もわなわなとふるえている。

「こわいか、おぬし」

少年に念を押した。

「はい、恐ろしゆうござります」

「そうであらう……わしも恐ろしい」

少年の掌心を握りしめなおすと、じりじりと後退しはじめた。松虫たちに声をかけた。

「心配しないで、寝ね」

「……」

「婚ばいなぞせん。出来るかどうか、試めしてみたまでじゃ」

「……」

「たしかに人には煩惱がある。心を離れた肉の炎がある。じゃが心と全く無縁ではない。肉の炎にだけは身をまかせられぬものじゃ。われらを支配するあるじは、心

であって、肉ではない」

「そのとおりでございます」

初めて女人のひとりが声を発した。

「騒がせたな」

明遍たちは侵入路を、もときた裏戸のところへまで引き戻した。戸外へ立ちいでて板戸をはめようとしたとき、明遍は眼前をふさぐ二つの女体を見た。

彼女たちは床を抜け出て、明遍を見送るつもりだったにちがいない。現に、

「明遍さま、有難い教えを頂きまして……」

と一人は丁重に頭をさげている。

だが、彼女たちの白い姿態からは強烈な体臭が匂った。明遍の全身を焼きつくす肉の炎までが、じかに感ぜられた。

「おぬしは……」

「明遍さま」

その一人が武者ぶりついできた。

「あっ！」

少年僧の悲鳴も聞こえた。彼も別の女人に抱きすくめられてしまったのだ。

おのれの意志や理性で掌握しきれると過信した明遍は、いままなましい人間の慾界へ引きずりこまれていく。二組の男女は、もつれ合いながら再び光堂の堂内へ転ろげ戻っていったのである。

荒くれた息づかい。無恥厚顔な行動。背徳の肉塊が仏像、菩薩像の眼下にむき出されてしまった。

——念仏ノトキ、心ノ散乱シ、妄念ノオコリ候ヲバ如何シ候ベキ

と、明遍が法然に問法するくだりが「四十八巻伝」にある。法然は答えて、

——欲界ノ散地ニ生ヲ受クルモノ心アニ散乱セザランヤ。煩惱具足ノ凡夫、イカデカ妄念ヲトドムベキ。ソノ条ハ源空モ力及ビ候ハズ

と、法然は自ら煩惱の断絶などには無力だと明言している。だからこそ「心ハ散リ乱レ、妄念ハ勢イオコルトイニドモ口ニ名号ヲ唱エナバ弥陀ノ願力ニ乗ジテ決定往

生ス」と阿弥陀仏の願力——本願を強調したのだった。

明遍は、

——コレ受ケ給イ候ハンタメニ参リテ候ツルナリと言ひ捨てて退出していった。別れの挨拶の一言も残そうとはしなかった。

「四十八巻伝」がつたえるこのエピソードは、僧都明遍の「生死」へのせっぱつまった姿勢を明示している。彼を受け入れた法然も真剣勝負に似た身構えであった。

明遍が去ると、法然は門弟たちをかえりみて、

——心ヲシズメ妄念オコサズシテ念仏セント思ワシハ、生マレツキノ目鼻ヲ取リハナチテ念仏セント思ワシガ如シ。アナコトゴトシトゾ

安らかな気分で、妄念なぞすべてふり払って念仏しようなどと思うことは、生マレツキノ目鼻ヲ取リハナチテ——つまり生ま身の人間である事実を放棄して念仏しようとする、この愚かさ、思い上がりと共通している。

あな、ことごとしとぞ、と否定し去って、明遍は切実な取り組みかたを費んでいる。

この法然と明遍との問答はずっと後年、法然が流罪から帰洛したあとのことになっているが、明遍の兄遊蓮房

のこと、大原談義のことどもを思い合わせると、両者のあいだで生死の命題と念仏をめぐって思索の深層部で論義がおこなわれ、またひとを介して多極からの探究があった事実が充分にうかがわれる。

ふとした一夜、あやまちを犯した男女がむかえる白日は、うとましいいばかりの輝きで彼らを射すくめるものだ。若い尼僧たちは光堂にこもりきったままである。看經する声や鐘の音も洩れないことから察すると、壁に身を寄せてうずくまっているだけなのであらう。

ひとしお哀れだったのは少年僧である。心身を根こそぎ磨滅しきったかたちで、病んだ野犬のようにうろろろと境内をさまよい歩いている。決して顔を上げようとはしない。地軸だけを見つめようとし、その暗い世界へ引きずりこまれてゆくことを願っているかのようである。

明遍は殿司の机に頬杖をついて、ぼんやりと窓外の境内を眺めている。その視野を何度も少年僧の打ちひしがれた姿がよぎった。その都度、明遍は眼をそむけた。おのれの恥部が、昨夜のままのかたちで放浪している感じなのだ。

男の欲望――

この人間界を浸たしていたのは、それだけではなかったのだ。女人にも、男にまさるとも劣らぬ欲望が渦巻いている。

明らかに昨夜の場合は、この女人からの挑戦だった。だからと言って明遍たちの気持が軽くなることにはならない。受容した者も同罪であらう。

わし自身は、どうなってもかまわない。この身を八つ裂きにされても……だがこの少年は、と明遍は再び眼下をよぎってゆく少年僧の背を丸くしたいたいけない影を注視した。

明遍は立ち上がると殿司を出た。境内の隅へ大股の歩を運んだ。少年僧に追いついた。

「おい、東山へゆくんだ」

「はあ？」

少年は何のことやら、と当惑した眼で明遍を見た。

「法然房のもとへ身を投ずると申していた。今こそ専修念仏へ帰する好き機会じゃ」

「……」

「必ず受け入れてくれるだろう」

「今、すぐにですか」

「今、すぐにだ。身体の隅々から罪障の熱気が立ち昇っている。たった今な」

「……」

「盗賊も人殺しも門中に加えてくれると申す法然房ではないか」

「はい」

元氣を出せ、と明遍はかがめた少年僧の背中を拳固で叩きたい思ひだった。叩けば、その快い響きがわが身へも戻ってきてくれるであらう。

三

他人に「道を説く」ということは、おのれ自身への救いともなる。大乘仏教の原点もここから発するのであらう。

少年層を東山吉水へ送り出した明遍は、罪の意識が薄らぐのおぼえた。こんどはあの若い尼僧たちだ。

光堂へ歩みかけたとき、山門からはいつてくる僧形の男をみとめた。

例によって派手な法衣で身を包んでいた。自ら「法

印」を呼称する尊長であった。

預けた尼僧たちの様女を見にきた、と告げた。明遍はためらうこともなく昨夜の顛末を打ち明けた。

「そなたが如何ようにでも扱え、と申されたゆえ、わしは昨夜あの女尼を犯したぞ」

さすがに軽い驚きの色が尊長の面上を走った。

「僧都、お若いのう。それで、その始末をどうつけるのか」

「兄澄憲のように、女を還俗させて何人も子を生ませようかと思う」

「それは重畳……して、尼僧は二人おる。おぬしがまぐわったのは松虫と鈴虫、どちらの方かな」

「どちらかと申しても……」

迷うのである。じつは明遍、闇のせいもあったが、はつきりと見分けていたわけではないのである。それにもともと松虫と鈴虫、個人的には格別の関心もなかった。

尊長は身をよじるようにして大げさに笑った。

「あるじ不明の牛車に、ただ無茶苦茶に乗りこんでしまわれたのか」

「牛車か」

「それはいい……それなら問題は軽い。僧都が恋いこがれでもしたら面倒なことになるが」

男女が一夜の戯れで情を交わすことぐらいは日常だった当時である。尊長は、明遍が相手の名も確認しないで戯れたことに安堵したようである。そればかりか謎めいた吹きさえ洩らした。

「かえって好都合じゃ。尼になったあとに男とまじわったとは……問いつめる折にな」

「問いつめるとは何を問いつめるのか」

明遍も聞きとがめた。

「戒を犯したことだけは間違いない事実だからな。よろしい。わかったぞ。僧都に累が及ぶことは避けて進ぜよう。だから恩を感じてもらおうぞ」

尊長は言い残して光堂の内へ姿を消した。やがて松虫と鈴虫を引っ立てるようにして現れると、山門の外に待たせてある牛車の方へみちびいた。

この法印、と言うよりも後鳥羽院側近の実力者は何を考え、何を画策しているのだろうか。

山門を去るとき、尼僧の一人が明遍をふりかえった。深い視線を投げてきた。

相変らず松虫か鈴虫なのか、その名はわからない。だが昨夜、明遍の腕の中にいた女人であることだけはたしかだった。ぬくもった肌の感触が明遍の身体によみがえった。

女の会釈に、明遍もうなずきを返したが、このまま二夜、三夜と重なっていったなら、惑溺の渦へ巻きこまれることは間違いないまい、と思った。

人間が生きてゆくこと自体が、ぬぐいがたい悪徳を背負わされているのであらう。

若い尼僧たちが光堂を去って数日が過ぎた。明遍が以前の「三論玄義」へ立ち戻れたか、と言えばそうはいかない。いまは若い尼僧の白い肉体が嘉祥大師の文字づらをちらつて消えない。

「明遍どのはこちらですか」

夕暮れのことだ。光堂の前に若い僧が立った。

「わしだが……」

「東山吉水から参りました。覚明と申します」

「法然ご房の門中でいらっしゃるか」

「はい。門中と申しても未だ新参者でございます」

覚明房長西。後になって法然義の有力な継承者、九品

寺義」の祖とうたわれた学匠だった。この建永二年（一二〇七）時、未だ二十四歳の若者である。

ちなみに長西は讃岐国に生まれた。父は伊予守国明と称した官僚である。幼時から神童の評判高く、九歳の折に召されて上洛した。管家に属して気象や算学、歴史などを学んだらしい。

十九歳の建仁二年（一二〇二）に出家、ただちに東山の法然禪室へ投じた。二尊院に現存する七箇条の起請文にも署名している。

入門当座は西山上人証空に師事していたが、師の法然の流罪に随行して讃岐までおもむき、さらにその入寂にも立会って思うところあったか、証空と死絶した。洛北の九品寺に住して、念仏の諸行も阿弥陀仏の本願の行である」と主張、後世の学人はこれを「諸法本願義」とよんだ。

この主唱からも理解できるように長西の浄土教は阿弥陀仏の本願（誓い）に力点を置いている。学風は多分に自然科学的であって、阿弥陀仏を人類の歴史断面から把握しようとする。

「先日おたくの若い人、緑道とか申す者がまいりました」

た」

あの少年僧は緑道という名だったようである。

「うむ」

「師匠さまからその身柄を預かりました」

「そなたが？ よろしく頼みまする。未だいたいけない者ですが一本義な少年です」

「はい。性、順な者です。ところで明遍どの、あなたは三論の学匠とうかがっておりますが、三論では阿弥陀仏をどのように理解しているのでしょうか」

若いだけにずばり斬りこんできた。

「三論そのものでは全く触れていないだろう」

「しかし、三論玄義の嘉祥大師は無量寿経や観無量寿経の義疏を述作されていらっしゃいます」

「善導の師でもある。長安の実際寺に若き善導が住していたとあるが、その寺は嘉祥大師吉蔵のために建立された寺だ」

こんなところでの立ち話は迂散臭さい、と明遍は光堂の内へ長西を招じ入れた。じつくりと語り合いたい相手であった。

明遍の机辺に坐した長西は、すぐにひろげてある「三

論玄義」を覗きこんだ。

「嘉祥大師のことですが、このお方の出生は？」

「江南の人。金陵（現在の南京）に住したと言われる」

「しかし道宣の僧伝によれば、姓は安、祖を安息の血をうけてゐるらしいですね」

「うむ」

「容貌は西梵に像（かたど）り、言は東の華ともありません」

若い長西だが、その学殖の広さはなかなかのものである。

容貌は西梵——西域人、言語は純粹な中華だ、と伝記作者は嘉祥大師吉蔵を浮き彫りさせている。

安息人とはバルチア。現在のイラン系民族である。

いつの代から吉蔵の家系が中国に定着したか明確ではないが、訳経に卓抜な素質は、この「血」と無縁ではあるまい。

「嘉祥大師が安息の血をうけていたとしたら……」

明遍は若い長西の意図を汲み兼ねた。

「阿弥陀仏への信仰が血肉の中に込みこんでいたのではないでしょうか」

「ふーむ」

「明遍どの、仏教における阿弥陀仏の信仰をどうお考えですか。学問としてはございません。純粹な人間と仏との関係においてです」

「……」

「阿弥陀仏が出世なさるまでに五十三仏があらわれたと經典に記されています。その鼻祖は燃灯仏でございます」

「錠光如来とも申したな」

「はい。いずれにしても光りであり、炎であります。阿弥陀仏は人間にとって夜空を赤々と染めぬく光り、炎だったのではないでしょうか」

法然の若い門弟はじつに大胆な推断を口にするのだった。（つづく）

「浄土句集」欄投稿要項

- 一、ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい
一、投稿先——

。〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

二 編集後記 二

○「秋、冬の大地には、再び春、夏が巡ってくる」——確かに、何かしら深みを感じる言葉である。移り変わる四季の変化をじつと観照して、はじめて感得した自然の本来のありよう……。実はこの言葉は、アメリカの大統領選挙と絡んで、またレーガン新大統領の登場にあわせて、大ヒットを生んだ、今は亡き女優ビクター・セラーズ主演の喜劇映画『チャンス』の中で、主人公がたびたび繰り返す名セリフである。無学文盲の一介の庭師の主人公が、ひょんなことから大統領候補にのし上がって行くという喜劇的なストーリー展開の中で、主人公がふとつぶやいた言葉が冒頭の感慨であり、折に触れてこの言葉を語るうちに、主人公の希望がますます上がって行くという、この映画の中のキー・ワードである。もとより、春、夏、秋、冬の四季の移ろいの中で生活する私たちには、新しい年の春の訪れ

は、心から待ち望まれるものである。冬の到来に、すでに春を感じ取ったのは、イギリスの詩人シェリーであったが、やがて来る春の再来に寄せる想いは、私とても、シェリーに決して劣るものではない。しかし今の私たちには、春の訪れそのものに、何か新しい不安を感じるのも事実である。四季の変化が、いたずらに昔のままを繰り返してはいないことを知ってしまったからでもあるだろうか。そんな想いが、庭師の独自に異常な驚きを覚えるのであろうか。

○いずれにしても、季節は二月。ひととき厳しい寒さをもたらしたこの冬も、次第に早春の予感を漂わしめている。この寒さの中に、すでに宿りはじめた春の到来に新しい希望をつないで、一層の努力をすることが私たちの勤めでもある。厳寒に身が縮む想いであるが、この時にこそひたすら心を磨いて、いずれ来るべき春の陽光に、この私の心とそして身体をも光り輝かせたい。

(原 裕)

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

(送料不要)

浄土 四十七巻 二月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十六年 一月二十五日 印刷
昭和五十六年 二月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

千〇三 振替東京八一八二一八七番

＝最新刊＝

ブッダの生涯と古代インド仏教世界を現地網羅取材

『ブ ッ ダ の 世 界』

—The World of Buddha—

東大名誉教授 中 村 元

駒沢大教授 奈良 康 明 編 著

大正大助教授 佐 藤 良 純

＝写真撮影 丸 山 勇＝

◎仏教学・考古学・インド学の最新学問研究と、現地国考古学局の
学術協力のもと一年半の現地撮影取材とによって成った、わが国
で画期的な国際大型出版。

インド亜大陸未踏の領域に入って精密に把えた900点のカラー・
モノクロ写真を駆使し、釈尊の生涯と古代インド仏教の歴史を、
学界権威が900枚に論述。

最大規模の取材と最高水準の調査研究を集大成した記念碑的図
説インド仏教文化史。

B4変型判 上製クロス装 美麗貼函入 5色刷カバー付
カラー写真 212頁 本文一色 204頁 全 416頁
現金定価 32,000円

発 行 学 習 研 究 社 〒145

東京都大田区上池台4-40-5

TEL 03 (720) 1111 内線 2737